

の誕生日には必ず育ての親家庭と一緒に祝う」、Ⅲ.2.9「養子が、産みの親に気軽に電話できる」、Ⅲ.3.11「養親が、産みの親と家族同様のつきあいをしている」に対する共感度の和の平均を2グループ間で比較した（最低値0，最高値4）。非当事者の平均値が0.86、当事者の平均値が0.81とどちらも非常に低い値であったが、わずかに当事者の方が高かった。しかし、この差は、 $\alpha=5\%$ でのt検定（両側検定）の結果、統計的に有意でなかった（ $t=-1.34$, $df=192.82$:unequal, $p=.182 > \alpha$ ）。

なお、上記の、当事者三者間のコミュニケーションの度合いを聞いた質問項目全般（Ⅱ.2～6）にわたって、非当事者の平均値が、中間の値（3.0）に近いことから、非当事者は、どのコミュニケーションのタイプに対しても、賛成でもなく、反対でもない、中間にいるようにみえる。

5. 血縁重視社会

まず、血縁重視の社会に関する項目Ⅳ.6「育ての親と迎えられた子どもは肩身の狭い思いをする。」をみると（【表8】参照）、非当事者の15.7%が共感しているのに比べ、当事者の1.8%しか共感しておらず、この差は1%水準で有意であった（ $\chi^2=14.74$, $df=1$, $p=.000 < \alpha$ ）。

【表8】肩身の狭い養親子

	非当事者	当事者
はい	47人 (15.7)	2人 (1.8)
いいえ	158人 (84.3)	18人 (98.2)

(注) カッコ内の数値はグループ内の%。

また、質問項目Ⅳ.8「他人の子を育てる人は立派だと思う」に共感した非当事者グループの割合（85.5%）は、当事者（35.6%）よりも非常に大きく（【表9】参照）、その差は1%水準で統計的に優位であった（ $\chi^2=96.52$, $df=1$, $p=.000 < \alpha$ ）。

【表9】他人の子を育てる人は立派

	非当事者	当事者
はい	254人 (85.5)	37人 (35.6)
いいえ	43人 (14.5)	67人 (64.4)

(注) カッコ内の数値はグループ内の%。

次に、養親の、ハンディキャップに対する否定的対処法（血のつながっていない事実からの逃避、自身のなさ）の3項目への共感度（Ⅲ.3.2, Ⅲ.3.3, Ⅲ.3.4）の平均値を、当事者と非当事者間で比較した。最高値4から最低値1の幅のなかで、全対象者の平均値は2.5であった。非当事者の、否定的対処法への共感度の平均値は2.7、また、当事者の平均値は2.1であり、当事者に比べて非当事者の、否定的対処法への共感度が高い。 $\alpha=5\%$ でt検定（両側検定）をした結果、 $t=7.79$, $df=350.02$:unequal, $p=.000 (< \alpha)$ となり、両グループ間の共感度の差は統計的に有意であった。

IV. 考察と結論

家庭復帰が不可能な養護児童のための養子縁組をもっと日本でもひろめるためには、人々のどのような考え方を強めればよいかを検討することを目的として、今回の意識調査をおこなった。

今回の調査の結果、仮説はおおむねすべて支持された。すなわち、第一に、子どものための養子縁組に対し、また、養子縁組当事者（産みの親、養親、養子）の気持に対して、当事者の方が、非当事者よりも高い共感度を示した。しかしながら、非当事者の殆ど半数が、子どものための養子縁組がもっと増えたらよいと思っていること、また、産みの親が子どもを養子にした気持ちに共感する非当事者がかなり多かったことをかんがみると、将来これまで以上に養子縁組を啓発していくと、養子縁組によって新しい家族の一員になる子どもがふえる可能性が大きいのではないかと、筆者は予想する。

第二に、非当事者が好む、産みの親、養親、養子間のコミュニケーションのオープン度は、当事者に比べて低く、これについても仮説が支持された。つまり、当事者がセミオープンアダプションを好むのに対し、非当事者はクローズドアダプションを好んでおり、この点では、多くの一般市民がオープンアダプションを支持するアメリカ（Romph 1993）と相違している。また、当事者と非当事者の、養子縁組当事者間のオープン度の高いコミュニケーションに対する共感度の差が、この調査結果の分析で唯一、統計的に有意でな